

人文社会科学部後援会事業実施報告書

申請者氏名：伊藤哲司

申請 No. 10（事業費）

事業区分：学生の教育研究活動支援

対象学年：3年次8人 4年次8人 大学院生1人（うち支出者17人）
（このほかに学部研究生2人が参加）

内容

報告項目：伊藤哲司ゼミ合宿（2022年9月14日～16日、於大子町）

報告内容：以下に記述

台風19号被災体験のインタビュー調査を中心としたゼミ合宿

現代社会学科国際・地域共創メジャー教授 伊藤哲司

1. ゼミ合宿のねらいとテーマ

2019年10月に来襲した台風19号（令和元年東日本台風）は、茨城県内でも久慈川や那珂川が氾濫し、大きな被害をもたらした。その水害を被った地域のひとつである大子町で、2022年9月14日～16日にゼミ合宿を行った。対面でのゼミ合宿は、3年ぶりのことであった。今回はもちろん感染対策を十全に行った上での実施であり、具体的な対策については、学生たち自身が策定し、それを担当教員が確認した上でみなに遵守させた。

今回のゼミ合宿では、大子町町営研修センターにゼミ生全員（留学中のゼミ生は除く）が参加し、町役場の協力を得て、被災した住民の方々からその体験にじっくり耳を傾けるインタビュー調査を活動の中心とした。その語りのなかから、地域の現状と直面している問題点をあぶり出し、コミュニティのレジリエンスを高めるための防災・減災の知恵について考察することになっている。この活動は、地元自治体からの要請でもある被災の記録づくりの一部になることを、当初から視野に入れて取り組んだ。

2. 大子町におけるゼミ生たちによるインタビュー調査

参加したのは19名のゼミ生であり、学部学生16名、研究生2名、大学院生1名であった。前学期の早いうちに日程を確定したため、みなが予定をそこに合わせることで

き、留学中のゼミ生 4 名を除き全員フル参加することができた。これらのゼミ生たちが、いわゆる「縦割り」で 4 名程度からなる調査グループを構成した。インタビュー調査にあたっては、被災体験を聞くというセンシティブな部分を含むため、街に繰り出す前に留意すべき点などについて、担当教員から入念にインストラクションを行った。

町役場の協力で、各グループには 1 名ずつの調査協力者をあらかじめ割り当て、町の観光協会などから無償でお借りした自転車を使い、それぞれの調査協力者がいる場所へ出向いた。そのインタビューが終わったあとは、街を自由に散策し、声をかけて応じてくれた方たちにさらにインタビューを重ねた。太子町の被災の記録づくりに直結するということもあり、学生たちもそれなりに緊張感を持って臨んだようである。茨城大学の腕章をつけて街を自転車で巡る姿は、町民の目にも留まりやすく、学生たちの活動を好意的に見たという複数の声を事後に聞くことができた。結果として、町役場等との比較的スムーズな連携が実現した。

3. 得られた成果と今後の展開

宿泊した太子町町営研修センターは、元太子第二高等学校の校舎を活用した施設であり、かつての教室を半分に仕切ってつくられた宿泊室を、快適に利用させていただいた。安価で宿泊させてもらえるのも、大変ありがたかった。

今回はとくにコロナ禍ということもあり、4 人部屋を 1 人ずつゆったりと利用することができた。食事は弁当が基本で、広い食堂でそれをいただいた。同じ場所で距離を確保しながらコミュニケーションを取るのも容易にできた。また体育館の施設を最終日午前中にお借りし、ゼミ生たちが企画したレクリエーションも行った。前学期、それほど互いに顔あわせることがなかったゼミ生同士が、今回を機に懇親を深めることができたことによって、今後のゼミ活動に弾みがつけられることを実感した。

インタビュー調査の貴重な結果は、ゼミ合宿後にさらにその文字起こしや編集をゼミ生たちに行ってもらうことにした。これらの具体的な成果は、上述のとおり、太子町の被災記録のなかに含められる予定である。

